

## 一 般 演 題

### 1. $^{201}\text{TlCl}$ シンチグラフィの大腸癌に対する有用性の検討

住 幸治 中西 淳 竹内 信良  
白形 彰宏 玉本 丈彦 片山 仁

(順天堂浦安病院・放)

大腸癌に対する  $^{201}\text{TlCl}$  シンチグラフィの臨床的有用性の評価を試みた。対象は、手術により確定診断された29症例。手術前日午後  $^{201}\text{TlCl}$  111 MBq 静注、10分後に撮像した。さらに切除標本自体もスキャンして集積程度をみた。29症例中23症例で集積を認めた。(約80%)腫瘍の大きさ、深達度、組織型と集積程度にはあきらかな傾向は認めなかった。肝・腎と重なる横行結腸や肝脾彎曲部の病変では、SPECT 施行が有効と思われた。腺腫と癌では、むしろ腺腫により集積しており両者の鑑別は困難であった。今後は、心筋シンチグラフィの際に腹部もスキャンすることなどでスクリーニング的検査として用いたり、過長結腸例や狭窄、閉塞例などで臨床的に有用な検査法となりうると思われた。

### 2. 骨・軟部組織腫瘍の $^{67}\text{Ga}$ citrate scintigram と MR Imaging の比較検討について

白土 誠 高橋貞一郎 (京浜総合病院)  
安河内 浩 国安 芳夫 (帝京大・放)

骨および軟部組織腫瘍の診断の一部として  $^{67}\text{Ga}$  シンチグラムと MRI 画像を対比しそれを解析し、診断上の情報を得る目的で検討した。

対象は昭和62年12月より平成2年11月までの3年間に行われた骨および軟部組織の MRI 250件 200例のうち同時に  $^{67}\text{Ga}$  シンチグラムが行われ、且つ病理組織診断が確定した22例である。

方法は骨および軟部組織腫瘍それぞれの  $^{67}\text{Ga}$  シンチグラムの集積度を肝臓・骨・筋肉と比較して4段階に MRI は骨・筋肉・脂肪と比較して4段階に別けて比較検討を行った。また、 $^{67}\text{Ga}$  シンチグラムの集積度と MRI 信号強度をおのおの数字化し、その平均と標準偏差を求めそれらを元に立体的に表現することにより、各組織ごとの特徴をとらえようと試みた。

以上の結果より次のような特徴が認められた。 $^{67}\text{Ga}$  シンチグラムの集積は骨肉腫、MFH で高く、軟骨肉腫、筋性肉腫で低い、MRI では Ewing 肉腫が T1・T2 強調画像で低く、その他では T1 強調画像で低く、T2 強調画像で高い。

病理組織診断の上でも鑑別の難しい腫瘍が多い中、現在得られうる画像を多方面にわたり解析することにより診断率の向上がはかれるものと思われる。

### 3. 悪性リンパ腫患者に於ける $^{111}\text{In}$ 標識リンパ球シンチグラフィの試み

藪島 聡 岡田 淳一 今関 恵子  
伊丹 純 宇野 公一 斉藤 正好  
有水 昇 (千葉大・放)  
内田 佳孝 (君津中央病院・放)

臨床的に悪性リンパ腫を疑われ千葉大学放射線科を受診した13症例に関し、平均  $1.4 \times 10^8$  個のリンパ球につき、 $1 \times 10^8$  個あたり約  $50 \mu\text{Ci}$  のインジウムで標識し再注入、24時間後に撮像を行った。悪性リンパ腫症例では、他の画像検査で直径 10 mm 以上の腫脹を示したすべての病変にインジウムの取り込みを認め、ガリウムスキャンよりも病変の描出に優れていると考えられた。また、病理診で悪性リンパ腫が否定された症例では取り込みは認められず、鑑別診断に有効であると考えられた。なお、これに先立つ実験により標識24時間後においては、標識リンパ球は、生存率・T細胞幼若化能ともに十分に保たれていることを確認している。

### 4. $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -Sucralfate を用いた胃シンチグラフィ

佐貫 榮一 栗原龍太郎  
(駿河台日大病院・放)

消化性潰瘍に汎用されている Sucralfate (アルサルミン) の上部消化管における動態を観察すべく  $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -HSA-Sucralfate (臨床治験審査委員会承認) を用いた胃シンチグラフィを9例(承諾患者)に施行した。

この結果(1)潰瘍部の描出は内服後に飲水法および体位変換を適宜行うことで可能となった。(2)粘膜欠損を